



タイトル Title	樽井藤吉『大東合邦論』
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	近代日本政治思想史入門 : 原典で学ぶ19の思想, 99-113
刊行日 Issue date	1999-05
資源タイプ Resource Type	Book / 図書
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90000500

Create Date: 2018-08-14

略歴

樽井藤吉は、嘉永三（一八五〇）年四月一四日、奈良県宇智郡南宇智村大字靈安寺（現在の奈良県五條市靈安寺）にて材木商の次男としてうまれた。故郷の静かな山里で幼少時代を送った樽井が東京に突然出奔するのは、明治六（一八七三）年のことである。上京した樽井は井上頼国の神習塾や林鶴梁の塾にて、国学の研鑽を積むこととなる。当時、これらの塾には佐藤政武のような征韓論の主張者が多く、樽井の思想と政治活動において、この時代、彼がうけた教育の影響の大きさが推測される。

彼の本格的な政治活動も、この頃、始まる。彼は岩倉具視に官吏選挙法を建白したり、友人と共同で時の政府に批判的な新聞を発行したりなどしている。また、西南戦争の際には、自ら東北地方に赴き、挙兵工作を行ったり、西郷敗北の後には、新たな日本の対外発展の経路を見つけるべく、無人島探検に赴いたりもしている。

そのような彼の政策的志向、即ち、東洋的な徳治主義と、対外的な発展に対する積極的な姿勢が、明確に現れて来るのが、彼を一躍世に知らしめた、「東洋社会党」の結成である。日本において始めて「社会党」の名を冠した政党として知られる、この党は、その名称にも現れているとおり、「東洋」の連帯と、徳治主義的・儒教的な「社会」の均等発展を主張する、極めて特異な政党であった。

この行為は政府の警戒するところとなり、東洋社会党は解散を命じられ、彼自身も一年間の軽禁固を命じられることとなる。出獄後も彼は、副嶋種臣の知を得て、中国や朝鮮に渡り、様々な策動を行っている。上海の東洋学館設立や朝鮮の開化派への支援はその代表的な例であろう。

このような彼の政治活動を支えたのが、郷里五條の富豪土倉庄三郎であった。明治二五（一八九二）年には、その土倉の支援を受け、樽井は第二回の衆議院議員に選出もされている。しかし、議員生活は、行動的な彼の性格に合致せず、彼は間もなく国会を離れ、再び野に下ることとなる。この頃、彼が執筆し、世に問うたのが本稿で取り上げる、『大東合邦論』である。樽井はこの書を、明治一八（一八八五）年、大阪事件により投獄される前後から執筆を始め、明治二六（一八九三）に至り、ようやく完成に至らしめている。

晩年の樽井は、朝鮮における、鉱山経営に失敗するなどして、不遇であった。この頃の著作に天誅組の功績を称える『明治維新発祥期』がある。大正一一（一九二二）年、死去。七三歳であった。

▲▽▲

著作抜粋

（頁数は、樽井藤吉『覆刻大東合邦論』（若月書店、一九七五））。

かの白人、わが黄人を殲滅せんと欲するの跡歴々として徴すべきもの有り。わが黄人にして勝たずんば白人の餌食とならん。しかしてこれに勝つのは、同種人の一致団結の勢力を養うに在るのみ。(142)

方今欧州文化既に高度に達す。しこうして社会瓜分角立し、未だ大団結為さざるは、独立競争の余弊なり。(…)若し合わせて一国と為り、協力して東向せば、則ち亜細亜を席卷し、宇内を包挙するも、亦難からず。(33)

わが日韓両国は、その土は唇齒、その勢は両輪、情は兄弟と同じく、義は朋友に均し。しかして両国の形勢日に解明に赴く。(…)智識を發達せしめ、もって開明の域に進まんと思せば、両国締盟して一合邦となるに如かず。(2)

ゆえに万国公法を説くものは、土地の大小、人民の多寡をもって階級を立てず。いま両国の旧号に拠らずして、もっぱら大東の一語を持って両国に冠するは、この嫌いを避けんとするのみ。(6)

この時に当り、[朝鮮] 振興の大計を画かんと欲せば、我と相合してその力を籍り、その短を補うの一事有るのみ。朝鮮の人士、なんぞこれを日本に求めざるや。日本のこれを朝鮮に求めざる所以は、合邦の利は朝鮮をもって多とすればなり。しかれどもこれを深思して熟計するに、我もまた利あり。しかして天の大勢はその必須を促す。(126)

そもそも合邦の制は、その集合するところの各邦、みなその自主を全うし、その人民をして一統国の大政に参聴するを得しむ。日韓合邦はもとよりかくのごとくならざるべからず。(…)つらつら清国今日の情を察するに、そのいまだこれを許さざるや明らかなり。(132-133)

この時に当って、日韓一国となり、清国と合縦すれば、露国の東洋艦隊も対馬海峡を過ぎて支那海に入るを得ず。百隻の鉄艦何ぞ輻輳と異ならんや。(140)

蛮民★集の境、即ち社会発生の原なり。列国競争の状、即ち宇内一国の漸なり。(…)大勢の向かうところ、一定の方針あり。則ち変遷の現象、亦た一定の脈略なかるべからざるなり。(25)

方今、天下の体勢は、漸次大団結を至せり。後世、宇内一統の国有るも、また、必ず合邦の制によって興こらん。ゆえに今この制を施さば、これ宇内一統国の模範となるものなり。大東合邦を画するものは、よろしく良制を定めてもって偉績を万世に伝うべきなり。(132)



第1節 『大東合邦論』とその時代

余の素志も亦丹芳[＝樽井藤吉]氏の所謂大東合邦に有る(『東亜先覚志士記伝』)。

▼大東合邦論と脱亜論

『大東合邦論』。この著作が、最初に執筆されたのは、明治一八（一八八五）年のことであつた。この年は、また、福沢諭吉が「脱亜論」を発表した年でもある。周知のように、福沢はそこにおいて、文明開化の必要性と、その前提として日本がアジア諸国に対する幻想から脱却する必要を強調した。それは、日本はアジアとの連帯、という夢を捨て、より現実的に、西洋諸国に見習うべきである、という主張であつた。

この二つの著作が同じ年に書かれたのは、恐らく、偶然ではない。それはこの前年に、朝鮮において、金玉均等、急進開化派によるクーデター未遂事件が起こっているからである。日清両国を巻き込んで行われたこの事件により、日本の東アジアに対する関心は飛躍的に増大することとなった。福沢はこのクーデターを支援した日本側の主要人物の一人であつた。脱亜論は、ある意味で朝鮮での戦いに敗れた福沢が、清国と朝鮮に突き付けた「絶縁状」あつた。彼は、一向に目覚めぬ朝鮮と、その朝鮮の守旧派を支援する清国に、嫌気と絶望を覚えたのに違いない。

樽井が金玉均等に接触したのは、彼等が本国で敗北し、日本に亡命してきてからであつた。つまり、福沢等が朝鮮を見放した後に、彼等に援護の手を差し伸べようとした者こそ、樽井等の勢力であつたのである。そのような、樽井の主張が、福沢と異なるものであつたことは当然であろう。樽井が主張したのは、アジア、就中、朝鮮との連携であつた。つまり、福沢が「悪友を謝絶」したのとは反対に、樽井は東アジア諸国、就中、朝鮮という「悪友」を更正し、これと連携してゆくことにより、西洋という真の脅威に対抗することを主張したのである。

▼韓国併合への影響

アジアとの連携。『大東合邦論』は、正にその目的実現の為に書かれた著作である。樽井は、自らの著作を広くアジア諸国で読ませる為、それをわざわざ漢文に直して発行した。その準備の為、漢文の学習を一から行うなど、彼はこの著作の完成までに、実に八年を費やしている。このような彼の努力にも拘らず、発売当初、日本国内におけるこの著作に対する反応は、冷淡であつたようである。が、海外での反応は異なつた。樽井によれば、同書は、朝鮮においては「壺千余部の頒布尚足らず」の状況であり、清国においても、梁啓超の手によって「十萬部」の翻刻が販売された、という。その意味で、樽井はある程度、自らの目的を達したといえよう。

このような樽井の著作の影響を強く受けた人物に、大韓帝国末期の朝鮮において活躍した親日団体・一進會会長、李容九がいる。本節の冒頭で記した言葉は、李容九が内田良平に述べた言であるが、我々はここから彼がいかに樽井に心酔していたかを知ることができよう。李容九率いる一進會は、後に韓国の日本への併合を求める上奏文を出し、日韓併合

への大きな契機を作り出すこととなるが、その際に一進会が依拠したのは（少なくとも彼等の主観において）、樽井の『大東合邦論』であった。

▼「大東亜共栄圏の先駆者」？

李容九が主張した「合邦」は、一度は実現されたかに見えた。しかし、現実のそれは「合邦」ではなく、「併合」であり、李容九の夢見たものとは大きく異なっていた。結果、李容九は失意の内に世を去ることとなる。樽井自身はといえば、彼は自らの過去の業績が「韓国併合」の先駆、として取り上げ、持ち上げられることに、純粹に喜びを覚えてもいたが、同時に自らの当初の構想と、現実の「併合」の間のずれに、若干の矛盾をも感じていたようである。

韓国併合以後、樽井の名は暫く忘れられる。晩年は不遇であった樽井の名が、再び世を賑わすようになるのは、昭和に入ってからのことである。彼は、日本の大陸進出の続く中、「大アジア主義」の創始者の一人として激賞されることとなるのである。

それでは、そのような毀誉褒貶を経た、樽井の『大東合邦論』とはどんな著作であったのであろうか。次にこの著作について、少し細かく見て行くこととしよう。

第二節 『大東合邦論』の主題と構造

▼競争の弊害

明治の思想家の例に漏れず、樽井も当時の日本、そして、アジアの置かれた状況に強い危機感を有していた。西洋諸国の新たな文明の前での、アジア諸国の無力。アジア諸国はその前に等しく文明開化の必要を迫られている。それは、日本も朝鮮も清国も例外ではない。

同じ頃、福沢も同様の必要を説いていた。福沢はそのような開化の為には、「独立」した個々人が「活発」なる精神を以って、「競争」することが必要であることを力説した。それは西洋を子細に研究した結果、福沢が到達した一つの結論であった。

しかし、樽井の考えはこれとは若干異なっていた。確かに樽井は西洋の文明に驚嘆と敬意の念を持って接し、日本の近代化の必要性を痛感したことにおいて、福沢と同様であった。その意味で、樽井もまた近代化論者の一人であったといえよう。しかし、同時に重要なのは、そのような共通の前提に立ちながらも、樽井が、福沢ほどには西洋文明を絶対的な価値を有するものとは考えなかった、ということである。彼は言う。今、欧州の文化は高度に発達している。しかるにその欧州の社会はといえば、依然分裂状態であり、大同団結することができない。これは西洋文明が競争に重きを置きすぎた結果である。欧州は面積にすれば、清国一国にも及ばないものであるのに、これは一体どうしたことであろうか。

このような西洋諸国の分裂は東アジア諸国にとって幸いである。唯でさえ強大な彼等が、万一、団結して東アジアに押し寄せたなら、各国はひとたまりもないであろう。

▼親和と東アジア

それでは東アジア諸国はどうしたら良いのであろうか。ここで樽井が持ち出すのが、「親和」である。全てのものがそうであるように、西洋文明も完全ではない。欧州は競争に重きを置きすぎるばかりに、親和を忘れ、結果として、東アジア諸国を利する結果となる。我々としては、これを上手く利用しない手はないであろう。そもそも、東を象徴する聖獣とされる、青竜の性格に象徴されているように、東という方角は、発育和親を司る方角であり、日本も朝鮮もこの東方の気を最も受けるものである。それ故両国は、この方面において優れており、これは我々にあって西洋にはない、我々にとっての利点である。これを活かさない手はない。

翻って、文明開化について考えて見ても同じことが言える。このような親和的な性格は、両国の間に自然と親密の情を生じさせるものである。もし、日本と朝鮮が知識を発達させ、文明開化を行おうとするならば、相争い、足を引っ張りあうよりも、お互いに協力して、その道を目指して行く方が好ましいであろう。それは必ず可能な筈である。

▼「大東国」

このような日朝両国の「親和」の、最も進んだ形として樽井が考えたのが、両国の「合邦」である。ここで注意しなければならないことは、樽井がここにおいて、日本が朝鮮を「飲み込む」ことを念頭に置いていたのではなかったことであろう。

一言で言うなら、樽井の言う「合邦」とは、日朝両国が対等の立場で、且つ旧来の日朝両国の国号と支配体制を程度の差こそあれ温存しながら、その上に共通の政府を置く、というものであった。つまり、樽井のこの構想においては、(少なくとも制度的には)日朝両国は全く対等な立場で、しかも、いつでも旧来の二国体制に戻れる要素を残しながら、一つの国家を形成するのである。それが後の「日韓併合」とは全く異なるものであることは容易に理解できよう。

そのような彼の主張を最も顕著に示しているのが、彼が両国合邦後の国名として考えていた「大東国」という名称であろう。樽井はこのような合邦後の国家に、日本か朝鮮のどちらか一方の名称を冠することを不適切であると考えた。何故なら、どちらかの名称を被せた国家をつくるということは、結局、一方が他方を飲み込んだことを意味しており、それは彼の言う、対等合邦、更には「親和」の精神にそぐわないからである。そこには新たな国家の名称が必要であろう。そして、樽井はそのような名称に相応しいものこそ、世界の東の端に位置し、親和の気を体現する両国の特徴を最も顕著に現した、「大東」という名

前であるというのである。

▼合邦の利害

しかし、それなら日朝両国は合邦から、具体的にどのような利益を引き出すことができるのであろうか。まず、日本の利益から考えてみよう。日本にとって朝鮮は、自国の防衛にとって重要な位置を占めている国である。この国が混乱し、他の列強に付け込まれるような事態になる事は、日本にとって、決して望ましいことではない。そもそも朝鮮が混乱しているのは、それが弱国であるからである。しかし、翻って考えるなら朝鮮は、日本全土の過半にも相当する国土を有する国である。それは確かに今の朝鮮は弱国であるが、文明さえ開化すれば、相当の力を持ち得る、ということの意味している。朝鮮を開化に導くことは難しいかもしれないが、もし彼が我と合邦するなら、自然、彼の渦乱も、治まり文明開化も可能となるであろう。その為には、日本は朝鮮に相当の労力を投入しなければならないかもしれないが、しかし、それが実現された暁には、清国やロシアとの通商も活発化し、何よりも列強の中でも最も危険なロシアの南下に備え得るであろう。これは日本にとって、何物にも代え難い利益である。

他方、朝鮮の立場に立って物事を考えてみよう。まず、何より、日本と合邦するなら、朝鮮はその軍事力を後ろ盾にすることにより、列強の脅威から自らを守ることが容易となろう。これだけでも朝鮮の利益は絶大である。また、日本との協力により、文明開化の作業も容易となろう。加えて、朝鮮独自の問題としては、朝鮮国王の立場の問題がある。朝鮮は今、混乱の最中に有り、朝鮮国王の権威は大きく揺らいでいる。それは、朝鮮王家が、日本の天皇家とは異なり、全国民の宗家でもなく、また、たかだか五百年程度の歴史しかないものであるからである。もし、朝鮮国王が日本の天皇と兄弟の誼を結ぶなら、朝鮮の王統は日本国民の擁護するところなり、安定することであろう。

更に、合邦の結果、両国は互いを敵国として考える必要がなくなり、軍事面での負担も軽減されるであろう。合邦して大きな国となれば他国も簡単には侮れぬであろう。この他にも利益は数多い。それらは合邦により失われるものに比べて極めて大きいであろう。

▼民族の平等

日本と朝鮮についてはそれで良いとしても、清国はどうなるのであろうか。この点について、樽井の主張は明確である。つまり、日本は清国に対しては、朝鮮と同等の態度をもって接することはできないのである。それは、「大東国」の範囲は飽く迄、日本と朝鮮とに限定されるものであり、無限定に清国更には、他のアジア諸国への拡大されるものではないことを意味している。

では、何故、清国は「大東合邦」の一員となることができないのであろうか。樽井はそ

それは清国の「情」が許さないのだと説く。ここで樽井が目にするのが、清国が多数の民族を包含した「帝国」である、ということである。日韓の合邦は、日本と朝鮮の各々の民族が自らの自主により、対等な立場で参加するものである。言い換えるなら、日本と朝鮮という国家の合邦は、即ち、民族の合邦でもあるのである（これは先の一進会の主張と一致している）。

それは日本と朝鮮がそれぞれ相当程度、「民族国家」的要素を有していた結果、可能となっていた。しかし、清国の国としての在り方は、全く異なる。清国には様々な民族が包含されている。もし、現在の清国のあり方をそのままにして「合邦」の中に組み込んだなら、清国の支配民族たる満州族と、それに支配される漢民族や蒙古民族、チベット民族、更には満州族と対等な合邦を結んだ日本民族や朝鮮民族との立場が、対等になることは不可能であろう。それだけでない。そもそもが帝国である清国は、依然、自主の国、という公法（国際法）の理念を十分理解せず、朝鮮の自主を妨げようとしている。

このような清国を含んだ合邦が、不適切であることは言うまでもないであろう。合邦は単なる国家の連合ではなく、一定の秩序と理念に従わなければならないのである。

▼清国の処遇

このように述べる樽井であるが、彼とて、東アジア世界における清国の重要性は熟知しており、この清国と良好な関係を築くことの重要だと考えていた。日本と清国は「東方の海陸二強国」であり、両者の対立は、西洋人を利するだけで無益な行為である。

また、現在の清国にとって、朝鮮が不安定なままでいることは、彼の国益に反することであろう。従って、清国にとっても、日朝両国の合邦は利益である筈である。そもそも清国には日本と朝鮮という二つの自主の国が自らの意思で合邦することを阻む権利はないのだ。

清国にとって、最大の利益は、合邦により強大化した大東国と合縦することである。これにより、清国朝廷は、東方の脅威を除去し、合わせて、最大の脅威であるロシアを封じ込めることができる。それは潜在的な脅威を取り除く、という意味で、大東国にとっても利益となる筈である。

▼天下の大勢

樽井が「大東合邦論」で述べた、「親和」の具体策は以上であった。しかし、それならどうして樽井はこのような考えを持つようになったのであろうか。ここで重要なのが、樽井が「天下の大勢」をどのように考えていたかであろう。

注目すべきは、樽井が、天下の大勢は漸次大団結に向かっている、と考えていたことであろう。つまり、今の世界は各国が切磋琢磨して過酷な「競争」を続けている。しかし、

その「競争」に勝ち残る為には、徒に他国と対立することよりも、自らの自主的判断により互いに「親和」することが望ましいであろう。この結果、各国は「合邦」をくり返し、次第に競争の単位を大きくしてゆくこととなる。現に、ドイツしかり、メキシコしかり、イギリスしかり、アメリカしかりである。これをどこまでも繰り返していけば、やがて世界は、一つの国にまとまって行き、「宇内一統」が実現するであろう。

今は互いに「競争」している西洋諸国であるが、やがて、その西洋諸国もやがては、一国に統一されていくであろう。その後には待っているのが、いよいよ西洋人とアジア人との、宇内一統をかけた最終対決である。アジアにとって、西洋が互いに足を引っ張りあっている今こそがチャンスであり、この隙きに我々は合邦という手段により、一足飛びに西洋に追い付き追い越さねばならないのだ。

▼宇内一統国の模範

樽井にとって、大東合邦はそのような競争世界の中で生き残って行く為の手段であった。しかし、同時に、彼がそれを単なる軍事的強国実現の為の手段としてだけでなく、将来の「宇内一統」の模範となるべき理想国家を産み出す第一歩である、とも考えていたことは見落とされてはならないであろう。樽井にとって、このような「世界の大勢」は単なる「流れ」としてではなく、ある文化が発達した結果の行き着くところであった。つまり、「宇内一統」へ向かう道は単なる軍事的・政治的統一への道であるだけでなく、同時に文化が向上してゆく道でもあったのである。

そのような結果もたらされる「宇内一統国」は、当然、優れた文化国家でもあることであろう。つまり、それは単なる軍事強国であるだけでなく、民族の平等や、公法の尊重等、様々な点で他の模範となるものでなければならないのである。それは言い換えるなら、日本や朝鮮がこの競争に勝ち残って行く為には、単に自らを軍事的に強化するだけでなく、同時に「徳」の面でも他に優るものでなければならない、ということの意味していた。

樽井にとって「大東国」は、正に、世界がそのような理想の「宇内一統」に向かう為の第一歩であった。これを理解して、我々は始めて、何故樽井が清国を「合邦」の枠組みから外したかを理解できよう。つまり、来るべき「大東国」は単なる、アジア諸国の野合では駄目であり、一定の理念に従い、公法を尊重するものでなければならないのである。残念ながら、清国はその国のあり方においても、また、実際の日本や朝鮮に対する態度を見ても、このような理想国家の一員となるのは不適切なのである。

第三節 『大東合邦論』とアジア主義

▼アジア主義への影響

「アジア主義」。複雑な内容を有するそれを敢えて一言で要約するならば、それは戦前そして、戦後において、過度の西洋への傾斜に反対すると同時に、アジアとの連帯を重視した、一連の思想群であったとすることができよう。

樽井の『大東合邦論』は、ある意味でそのようなアジア主義の、比較的早期のものであり、故にそれは後のアジア主義者に多くの影響を与えることとなった。例えば、内田良平等の黒龍会の大陸での活動は、事実、この合邦論から影響を受けたものであるし、また、先述のように、大陸の側でも李容九や梁啓超のようにな、この著作に感化され、アジアの団結を夢見たものも多かった。より広く言うなら、あの大東亜共栄圏の思想も、樽井から直接的・間接的な影響を受けていた、と言えよう。

▼行動の人

しかし、ここで重要なことは、彼等が樽井に学んだ内容は、それぞれ微妙に異なっていた、ということであろう。『大東合邦論』は、豊富な内容を含む著作であるが、同時に、様々な相反する要素を含んだ著作でもあった。例えば、「大東合邦」の構想一つ取ってみても、我々は樽井の主張の中に、様々な矛盾を見て取ることが出来る。なるほど、樽井は日朝両国が平和裏に対等合邦することを再三強調している。しかし、同時に樽井は秀吉の朝鮮出兵も、江華島事件も正当化する。彼はこれらを当時の日本の事情や朝鮮の開化の必要性から援護するのである。それは恰も今日の「合邦」においても、そのような軍事力の行使が必要であることを示唆するものようでもある。日本の軍事力を基盤とした、開化と合邦。樽井がこの二つの要素をどう考えていたかは明確ではない。或いはそれは時々の「大勢」によってのみ左右されるものであったのであろうか。

樽井以後の思想家は、矛盾に満ちた樽井の思想を、自らの意図に合う部分を中心に継承した。例えば、李容九は、日韓の対等合邦、という点では、樽井の良き継承者であったが、朝鮮旧王朝支配層に対する姿勢においては正反対であった。一部の「大東亜共栄圏」の主張者は、アジア諸民族を一致団結させ、白人帝国主義との聖戦へと導くことのみを読み取り、民族平等の主張は読み飛ばしたかのようにも思える。注意せねばならないことは、樽井からの思想的継承においては何れかが誤りである、とは言い切れない、ことであろう。実際、そのどれかだけを彼の本意である、と言うことは不可能である。樽井は、思索の人というよりは、行動の人であった。重要なのは現実的效果であり、彼にとって、そのような矛盾は大きな問題でなかったのかも知れない。

▼アジア主義の問題

樽井の矛盾は、同時にアジア主義それ自身の矛盾でもあった。事実、アジア主義と言っても、その内容は多様であった。それは、アジア主義が、アジアとの連帯以外に共通項を

持たない思想群であることの帰結であり、その限界でもあった。

アジア主義の問題は、大きく二つあろう。その第一は、「連帯」を何如にして実現するか、ということである。日本の側がいくら「連帯」を呼び掛けても、アジアが日本を信頼せず、また、連帯の必要を感じぬ場合、それは結局、「連帯」の押し付けに過ぎないであろう。それは即ち、「連帯」をどのような形で実現するか、ということにも繋がる問題でもある。連帯を拒む者との、合邦や連帯。両者が真に対等であり、「親和」することは本当に可能であるのか。第二の問題は、アジアとの連帯が、本当に日本の抱える問題を解決する切り札と為り得るのか、ということである。福沢が問い掛けたのは、正にこの点であった。連帯を唱えるのは容易である。しかし、それは本当に効果があるのか。

樽井はこういった問題について答えてはくれない。第一の点について、樽井は朝鮮に対し合邦の利は熱心に説きはするが、朝鮮がそれを受け入れない場合の処遇には触れていない。第二の点についても、大東合邦と大東国と清国との協力が果たして西洋列強と対するに足るものなのかについて、樽井は沈黙する。そして、これらの点こそ、樽井の思想の最大の弱点であり、それは即ち、アジア主義の限界であった。『大東合邦論』は、その意味でアジア主義の出発点であり、同時に終着点とも言える著作であったのである。



参考文献

一. 樽井藤吉『覆刻大東合邦論』（若月書店、一九七五）。

現在の時点で最も容易に手に入る『大東合邦論』のテキスト。初版本をベースとし、再版本の部分（日韓合邦後の樽井の見解もある）も載せられており、便利な一冊である。

二. 樽井藤吉「大東合邦論」（抜粋・読み下し）、竹内好編集・解説『アジア主義』（筑摩書房、一九六三）。

掲載は部分のみとなるが、忠実な読み下しと解説がつけられている。また、他のアジア主義者の著作やその解説も合わせて読むことが出来、アジア主義の格好の入門書と言える。

三. 田中惣五郎『東洋社会党考』（新泉社、一九七〇）。

表題は『東洋社会党考』となっているが、樽井の手紙や演説なども載せられている。また、樽井の故郷五條の訪問記もあり、樽井思想のバックグラウンドを知る上で有益である。

四. 旗田巍『日本人の朝鮮観』（勁草書房、一九六九）。

日本人の朝鮮観とその歴史的変遷を知る上での入門書。視角は若干古くなっているが、日本人の対朝鮮意識の流れの中での樽井を確認する上では、依然、有益な書物である。

五. 滝沢誠「樽井藤吉と大東合邦論」、『伝統と現代』（一九七四年九月）。

樽井について、主として黒龍会と一進会の合邦運動に与えた影響に焦点を当てて論じている。

六. 桜井義之『明治と朝鮮』（桜井義之先生還暦記念会、一九六四）。

第一章に樽井についての記述がある。その他、福沢や森鷗外等の朝鮮観についての記述があり、これらとの対比の中で、樽井の位置を再確認することも、また有益であろう。

七. 西尾陽太郎『李容九小伝』（葦書房、一九七七）。

李容九の伝記。李容九が美化され過ぎている嫌いもないではないが、樽井の思想が、朝鮮半島においてどのように受け取られ、裏切られていったかを知る上で貴重な著作である。

八. 初瀬龍平「アジア主義と樽井藤吉」、『広島平和科学』一、一九七七年。

アジア主義の全体的な流れから樽井の思想を位置付けた秀作。マクロな視点から、樽井を近代主義者であると結論づけている。スケールの大きな分析が貴重である。

九. 伊東昭雄「『大東合邦論』について」、『横浜市立大学論叢<人文科学系列>』第二四巻第二・三号。

『大東合邦論』について、初版と再版の比較からその内容についてまで詳しく論じた論稿。また、本章で重要視した「親和」についても詳しく触れられている。

一〇. 影山正治「現代訳『大東合邦論』解題」、『不二』（一九六三年二月）。

樽井に対して、アジア主義者の立場から書かれた解説。戦後のアジア主義者における樽井に対する評価を垣間見ることができる意味で、小文であるが貴重である。